

鶴岡首席交渉官によるぶら下がり記者会見の概要

日時：平成27年4月21日（火）8：10～8：20

場所：内閣府

（記者）昨夜の協議を受けて、今回の首席会合の抱負は。

（鶴岡首席）今回の首席会合は、TPPについて2つの重要な進展があったうえで開催されるという点で、TPP交渉全体を進めるうえでも期待ができるのではないかと、私も気を引き締めて臨まなければならないと思っている。2つの進展というのは、1つは、米国における連邦議会の貿易権限法の審議が、長年なかなか進まなかったものがついに審議入りしたということで、これはTPP参加各国が待ち望んでいた、注目されていたことである。もう1つは、本日未明まで行われた日米の閣僚協議において良い協議ができ、その閣僚協議を踏まえた事務的な協議がさらに続いているということで、日米間の交渉も進展が見られている。この2つの事態というのは、TPP交渉全体を進めるうえでも、大きな機運になるものと思っている。各国からも我が国も、日米交渉を進めるべきであるという期待と要請を受けてきており、TPAについても米国の宿題としてなかなか果たされなかった、そういった2つの大きな事態が動いていることが、首席交渉官会合でも好影響を与えて、TPPの重要な課題について進展をみることができると期待している。ただ同時に、やはり12か国の交渉なので、検討している分野も非常に幅広く、困難な分野がまだ残っている。技術的にも困難であるうえに、政治的に最終段階に至って非常に重い課題が出てきているので、これらの課題を首席の間で十分整理をしたうえで、日程は未定であるが、できるだけ早い機会に開催されるであろうTPPの閣僚会合につなげていくという目標に向けた具体的な成果を出していきたいと思っている。

（記者）今回の首席会合の主な課題は。

（鶴岡首席）今回の首席会合は正味4日あるいは5日程度なので、集中的な議論を重要課題について行うことが想定されている。今残された課題のなかでも非常に作業が重要だと考えられ、また多くの課題が残っているのは知的所有権に関する取扱い。この章はさまざまな国の利害が錯綜する章であり、関係する分野も多岐にわたるので、丁寧な議論をし、各国が受け入れられるルール作りを着実に進めることが重要だが、なかなかこれまでも困難な課題が乗り越えることができずに来ているというのが実情。したがって今回生まれている機運を追い風

として、これまでなかなか打開できなかった困難な課題を、知的所有権の問題についても実現したうえで、さらに先に進めていきたいと思っている。

（記者）閣僚会合の日程は米国のTPA法案の成立を見届けてからのセッティングとなるのか。

（鶴岡首席）閣僚会合の開催はTPPの交渉自体が基本的なとりまとめを視野に入れることが可能になった時点で検討されるもの。閣僚が会合を持ったところで成果が出ないということは、もはや時間的な制約のなかで想定されない。したがって、TPAが成立するかということが一つの参考になる状況だとは思いますが、すでにTPAは連邦議会で審議入りしているので、その成立の是非ということが決定的というより、交渉自体が現状の進展を踏まえたうえで、内容的にどこまで進められるかということが今後の閣僚会議に向けた工程表を考えるうえで最も重要な判断要素である。

（記者）扱うテーマはほぼ知的財産に絞られているという認識なのか。

（鶴岡首席）残念ながらまだ課題は多く残っており、知財の件を申し上げたのはこれが最も困難な分野だと私が考えているからだが、そのほかにもさらに詰めを要する、丁寧な議論をしていかななくてはならない課題が残っている。これをどのように進めるかについても、今回の首席会合の冒頭でも各国の首席と十分に意見交換をしながら、できるだけ有効に今回の会合の日程を活用しようと思っている。

（記者）TPAの成立の見通しが立たないなかで、まだ進まないという懸念もあると思うが。

（鶴岡首席）各国の見方にかかわることなので、そういった見方を持っている国があるということは事実だと思うが、連邦議会において上下両院合同の超党派の法案がまとめられたうえで審議に入っているということは、これまでになかった重要な展開である。もちろん法案の審議というものは最終的に法案の採択、すなわち法律が成立することが必要であるが、流れとして今申し上げたような米議会の大きな動きが出てきているので、首席交渉官の間で政治レベルに至る以前に解決を要するような、残されている技術的な課題については、これを一気に整理していく機運というのは今の客観的な状況のなかでは十分存在していると思う。また、日米の閣僚協議が進んでいるということや、総理の訪米も注目さ

れているが、そういった様々な今後の進展を動機付けるような事態が生じているというなかで、計画した訳ではないが、たまたま首席会合の日程が合わさったということは、一つのいい機会として首席同士でも最大限活用し、TPPの最終的な決着に向けて今回大きな成果を出したいと思っている。この間も各国の首席とさまざま連絡をとってきており、各国も十分な準備をしたうえで首席会合に臨むと思う。ただ、まだ詰めなければならない問題が多く残されているので、今回の首席会合によってすべてが解決するということは想定されない。閣僚会合の準備も、一回の首席会合ですべて終了するかどうかは今の段階では予断できないが、その課題は容易ならざる課題だと思っているので、最終段階に入る入口として今回の首席会合は位置づけられると思っている。

(記者) 首席会合の機運を高めるほど、日米は進展したと言えるのか。

(鶴岡首席) 日米の二国間の問題と、日米が二国間で合意していく課題がTPPの各国の立場に影響を及ぼすような面と二つあるが、各国が、日米が進んでいない、あるいは日米がいつまでも決裂まがいの進展を見ない状況であると評価していると、なぜ自分たちが交渉を進展させなければならないのかということで、日米交渉が進まないこと自体がTPP全体を止めてしまうという、一面悪影響という点がこれまであったと思う。それを口実にしている国もあったと思うが、閣僚が今日も未明まで大変長時間の交渉を、残っている懸案について真剣に行ったということで、各国から見ても日米の交渉が真剣な最終段階に至っていると評価してもらえと思う。また、首席会合においては、私からも、あるいは米国の首席からも、日米交渉が現在残された課題はあるものの、進展を見ているということは報告するので、TPAの動きと相まって、今回の首席会合の機運を高める、幸先のいい形で議論が始められるのではないかと期待している。

(以上)